

◆『しあわせになるための「福島差別」論』の安齋育郎担当部分の概要

【安齋育郎プロフィール】1940年、東京生まれ。9人きょうだいの末っ子。4歳～9歳は疎開のため福島県二本松で過ごす。東大原子力工学科卒第1期生、工博。東大医学部助手、立命館大学経済学部・国際関係学部教授をへて、名誉教授。国際平和ミュージアム・終身名誉館長。ベトナム政府「文化情報事業功労者記章」、韓国「ノグンリ国際平和財団人権賞」、日本平和学会「平和賞」など受賞。国境なき手品師団・名誉会員。

著書に、『ビジュアルブック語り伝えるヒロシマ・ナガサキ』全5巻（新日本出版社、第7回学校図書館出版賞）、『ビジュアルブック語り伝える沖縄』全5巻（同、第9回学校図書館出版賞）、『ビジュアルブック語り伝える空襲』全5巻（同、第11回学校図書館出版賞）、『だます心 だまされる心』（岩波書店）、『原発と環境』『福島原発事故—どうする日本の原発政策』『科学と非科学の間』『安齋育郎がビビビッときた話—疑う心、科学する眼』『子育て・子育て 被ばくカット・マニュアル』（かもがわ出版）など。

NHK『だます心 だまされる心』（全8回）、『あさいち』『クローズアップ現代』、『日曜美術館』ETV 特集『事態を侮らず、過度に恐れず—「福島プロジェクト」の挑戦』など、日本テレビの「世界一受けたい授業」などに登場。放射能の専門家として、毎月3日間福島を訪れ、調査・学習・相談活動にとりくんでいる。

事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う

1. 私の生きた道

(1) 人間は、毎日多様な命題に真偽の判断を加え、受け容れていいかどうか、信じていいかどうかを切り分けなければならないが、誰だってあらゆる命題の真偽を的確に判断できる訳ではないので、命題の種類に応じて「専門家」に判断を委ねる。そして、予防的に、「この専門家の言うことは信じていいのだろうか」を判定する目印として、「反原発派」とか「御用学者」とかレッテルを貼ることになりがちだ。私も、時と場合に応じて、両方に分類されてきた。

(2) 1972年に日本学術会議主催の初めての原発問題シンポジウムで「6項目の点検基準」を提起する基調報告を行なった後は、「反国家的イデオログ」というレッテルを貼られ、1979年3月のスリーマイル原発事故までの7年程の東大医学部助手時代には、村八分・ネグレクト・差別・監視・恫喝・懐柔など様々なハラスメントを体験した。

「6項目の点検基準」＝①自主的なエネルギー開発であるか、②経済優先の開発か、安全確保優先の開発か、③自主的・民主的な地域開発計画と抵触しないか、④軍事的利用への歯止めが保障されているか、⑤原発労働者と地域住民の生活と生命の安全を保障し、環境を保全するに十分な歯止めが実証性をもって裏づけられているか、⑥民主的な行政が実態として保障されているか

(3) その意味では、この国の乱脈な原発開発に与してきたとは思わないが、福島原発事故のような破局的事故を防ぐ国民的な抵抗線の構築に十分役立てなかった非力を深く悔み、事故後は「福島プロジェクト」を立ち上げ、毎月3日間の福島通いを基本とする調査・学習・相談活動に取り組んでいる。

「福島プロジェクト」は、「放射線は被曝しないに越したことはない」という認識を基本とし、汚染の実態を調査するだけでなく、「放射線から身を守る4つの原則（①除染、②遮蔽、③距離の確保、④被曝時間の短縮）」を実践的に応用し、被曝を極少化することを目指しています。私個人は、原発の計画的廃絶を求める立場ですが、調査依頼者に原特定の立場を求めることはない。

2. 御用学者呼ばわり

(1) 私は、①「余計な被曝はしないに越したことはない」と考えていますが、一方では、②「自然放射線被曝の時間的・地域的変動の範囲内に収まる程度の汚染実態であれば過度に心配する必要はない」と考えている。もちろん、汚染を放置するのではなく、それを減らす実行可能な対策をとることを前提としている。①と②の間で、被災生産者の懸命の努力に応える道を探ることが大切だと考える。

(2) 2012年4月10日(火)放送のNHKクローズアップ現代『広がる放射能“独自基準”～食の安心は得られるか』で、食材中の自然放射性物質のことにも触れながら、「事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に向き合う」姿勢で話したが、「食品の放射能汚染は“ゼロ”であるべきだ」と考える人々は「何が何でも汚染ゼロでなければダメ」と言わない私に苛立ったらしい。

番組放送後、ある認定団体によって「御用学者」と認定された。今でも「安齋育郎」と入力すると、「安齋育郎先生が御用学者と認定されました」という項目が上位にある。

(3) 情報提供者と情報利用者双方には心しなければならぬことがある。

情報提供者は、提供する情報の根拠と判断の基準を明示するよう心がけること。

情報利用者は、できるだけ、その情報がどのような根拠と判断基準に基づいて発信されたのかをフォローすること、それが可能でない場合は、他の情報発信者や情報利用者の判断と突き合わせることを。

根拠が定かでない特定の情報にのみり込んで独善的な視野狭窄に陥らないために、チェック機能を確保するということです。

3. 客観的命題(科学的命題)と主観的命題(価値的命題)

(1 マックス・ウェーバー流に言えば、人生で出会う命題には、「客観的命題」(科学的命題)と「主観的命題」(価値的命題)がある。「御用学者」と言われる人びとは、自分の価値判断を国家の価値判断に従属させ、客観的命題についての判断さえも国家の価値判断に従属させる(事実を隠したり、ウソをついたり、意図的に過小評価や過大評価を行なう)ような学者のことだろう。加藤周一は「全部ホントのことを言って、全体として錯誤に導く方法がある」と言った。「言ったこと」は全部正しいが、都合のいいことを殊更に強調し、都合の悪いことを無視するといった方法だ。私は事故以来「隠すな、ウソつくな、過小評価・過大評価するな」と言ってきた。

4. 「レッテル貼り」は時に内部対立の原因に

いま、「あの人は福島の人」とか、「あの人は福島から逃げた人」とか、「あの家は補償金をもらった家」とか、ある種のレッテル貼りが被災者相互や被災地とその他の地域の人々との相互理解と共同の妨げになっているように感じる。父親が仕事の関係で福島に残り、母子が東京に移住していた家庭が3年後に帰還しようとしたら、近所から「あんたら逃げたんよね」と言われて悔しい思いをした話など聞くにつけ、ともに被災者であるのに「逃げたか、逃げなかったか」で対立感情を抱えているようでは、福島原発事故という未曾有の人類史的事故の教訓の上に、被災者が「こころ一つに」国家や産業界に責任ある対応を求め、この国の安定・安心なエネルギー政策への転換を求めるようなことは到底覚束ないように思える。

「原発避難者というだけでいじめられ、避難者だと公にできない」(東京都千代田区)、「バカにされ、嘲笑され、恐喝された」(神奈川県横浜)、「被災者の子は公園で遊ぶな」(山梨県甲府)、「持ち寄り食事会をやるが、東北の食材の料理はもってくるな」(京都府京都)など、全国で起きているたくさんの事例が、ある意味で危機に対処する国民の「民度」の実態を表していると感じる。